

廃墟

トムの人生は、炭鉱に初めて入った二十歳前のあの日で、ある意味終わっている。

そして悪夢はいまもトムの影のようにびったりと張り付いている。ハニガー炭鉱の息子であるトム・ハニガーの存在などもう誰の頭にも欠片もないだろうが、「血のバレンタイン」の惨劇が忘れられる日はこないだろう。

ああそうとも。俺は罪人だ。

だからこれは報いなのだろうか。それともやることなすこと失敗続きの自分の最後の墓穴か。がらんとした部屋の中には薄いマットレスが置かれているだけだ。転がって見上げる窓にはカーテンもなく、空は曇っている。

不意に足音が響いて、トムはびくりと体を震わせた。

このフロアは無人だ。もしかするとビル全体がほとんど無人なのかもしれない。この古いビルに連れてこられた当初は、同じような不法入居者がチラホラいたようだが、夜毎繰り返される異様な物音に慄いたのか、いつのまにやら周囲に人の気配を感じなくなった。だから、足音がしたらそれはまず間違いなくあの男だ。

逃げたいわけでもないのに立ち上がると、足枷に付けられた鎖が鈍い音を立てた。足音が近づき、扉が開く。

自分のやってきたことを振り返ると、見事に失敗と裏目続きだったとトムは思う。

そもそも生まれた炭鉱の町の気風が性に合わなかったのに、トムは炭鉱主の息子だった。それでも父の息子として一通りのことはやって見せなくてはと肩肘を張って現場に入った途端に事故を引き起こした。そして続いたあの惨劇だ。大量殺人を犯したのはいけない炭鉱夫のハリーだったが、ハリーが狂ったのはそもそもトムのミスが原因だった。

父は最初心情的に、それから物理的にも跡取り息子としてのトムの存在を抹殺した。トムは帰ってくるなと告げられて、白い壁の療養所で十年を過ごした。だが黒い影を忘れようとしても悪夢はしつこくついてきたし、父が死んでやつと故郷に戻り、今度こそ戦おうとしたら見当はずれの空回りをしただけだった。取り返しのつかない罪をいくつも犯し、もう帰るところはどこにもない。